

# 授業報告 I

2009 年度冬学期 社会思想史

責任担当者：平子友長（社会学研究科）

## 1 講義＝演習連結型授業の枠組み

9月に5名のリサーチ・アシスタント（以下RAと略記）と会合を持ち、冬学期に行われる講義＝演習連結型授業の基本的枠組みについて詳しい打ち合わせを行った。この打ち合わせに基づいて以下の授業プランを作成し、2009年10月7日第1回授業において学生に配布した。

### 【授業プラン】

講義テーマ：ステイト、ネイション・ステイト概念の思想史

2009年度冬「社会思想史」は、2008年度冬「社会思想」（木4限）に引き続き、一橋大学教育プロジェクト「講義＝演習連結型授業—『単位の実質化』の実質化—」の支援を得て行われる。一橋大学における教育水準を向上させるために、西洋諸大学で行われているTutorium, tutorial system（個人指導システム）の長所を活用することを試みる。各受講生には「研究補助者」（Research Assistant 以下RAと略記）が配置される。RAは、研究テーマの選択、参考文献の選択、プレゼンテーションの準備、期末レポートの作成までの全過程にわたって、面談、メール等あらゆる手段によって、担当受講生を援助する。昨年度の経験を反省材料として、今年度は、RAによるtutorial systemをさらに改善してゆきたい。受講生の積極的な授業参加を心から願います。

## 【スタッフの配置】

講師：平子友長

RA：宮本敬子（統括者）（社会学研究科院生 専攻：西洋社会思想史）

白井亜希子（社会学研究科院生 専攻：西洋社会思想史）

赤石憲昭（社会学研究科院生 専攻：西洋社会思想史）

南 孝典（社会学研究科院生 専攻：西洋社会思想史）

小谷英生（社会学研究科院生 専攻：西洋社会思想史）

### 1. 講義

12月16日までは主として教員による講義を行う。ただし、11月25日（水）、12月3日（木）は、教員の海外出張のためRAによる講義が行われる。

### 2. プレゼンテーション

1月の3回の講義（13日、20日、27日）は、受講生によるプレゼンテーションにあてる。毎回1人30分（20分報告、10分質疑）で3人ずつ行う。プレゼンテーションを希望する受講生の中から、RAと協議して、9名を選抜する。

### 3. 成績評価

年度末に研究報告（A4 40字40行で5枚以上 10枚程度が望ましい）を添付ファイルで提出する（締め切り2010年2月5日金 12:00まで）。これに基づいて成績評価を行う。事前にRAとよくコミュニケーションをとってRAのアドバイスに従って研究報告を提出した受講生には、原則としてAを与える。

### 4. 研究報告の作成手順

#### (1) 受講申請（10月31日締め切り）

「社会思想史」の単位を取りたい受講生は、「自分の研究課題」を、RA統括者宮本敬子宛にメールで登録申請を行う。その際、「件名」に必ず「社会思想史（氏名）」を記入する（「件名」を正しく記入しないと、削除される可能性がある）。研究課題未定の受講生は、「未定」として登録をする。

#### (2) 研究課題

以下に挙げる文献の中から1つを選択し、指定された文献を精読し、その内容を要約すること。その際、キー・ワードを3つ挙げ、それらの理論的関連を説明しつつ、論文の論理構造の把握に努めること。最後に、取り上げた文献の内容に対する自分の見解を述べること。

〔文献〕

1. ホブズ『リヴァイアサン』第2部（岩波文庫、世界の名著）：自然権、自然状態、コモンウェルスの関係について
2. ロック『市民政府』（岩波文庫など）第1～9章：所有権、社会契約、市民統治の関係について
3. ルソー『社会契約論』（白水社など）（第1編、2編）：社会契約と一般意志
4. アダム・スミス『諸国民の富』（中公文庫など）第4編第7章「植民地について」：アダム・スミスと植民地問題
5. カント「啓蒙とは何か」（『啓蒙とは何か』岩波文庫）：啓蒙、理性の公共的使用と世界市民社会
6. カント『永遠平和のために』（岩波文庫など）：国際法と世界市民社会
7. ヘーゲル『法の哲学』第3部第2章「市民社会」（世界の名著35）：市民社会の諸矛盾
8. マルクス『共産党宣言』（大月書店、新日本出版社など）：資本主義とは何か？
9. マルクス『資本論』第1巻第24章「いわゆる本源的蓄積」（大月書店、新日本出版社など）：資本主義生成の歴史
10. 三浦永光『ジョン・ロックとアメリカ先住民』お茶の水書房 2009
11. ベネディクト・アンダーソン『増補 想像の共同体』NTT出版 1997
12. 永原陽子（編）『「植民地責任」論』青木書店 2009：序から第13章までの論文から3本を選択し、それらについて論述せよ。

なお、これ以外の研究課題を選択したい受講生も歓迎する。希望する「研究テーマ、研究計画」について RA と相談して決めてほしい。

### (3) RA とのコミュニケーション

11月始めに、RA と受講生のグループ分けを行う。11月11日（水）の授業時間に、RA の自己紹介と RA が担当する受講生の紹介を行う。この場で、今後の Tutorium の進め方について各グループごとに打ち合わせを行う。進行速度は個人ごとに異なっていると思われるので、個人指導の進め方については、各 RA が個別に判断し、その都度適切な指導を行う。指導の形式は、ゼミ形式、個人面談、メールなどを駆使する。

### (4) プレゼンテーション

1月にプレゼンテーションを希望する受講生は RA にそのことを申し出て、プレゼンテーションのための指導を受ける。プレゼンテーションを行う受講生（9名）は、2010年1月6日までに決定する。授業当日は、プレゼンテーションする内容のレジュメを参加者全員に配布する。プレゼンテーションには RA 全員が参加する。

(5) 最終報告

プレゼンテーションを希望しない受講生も含め、1月は年度末の研究報告の作成に集中する。RAのアドバイスを受けて、各自、納得のゆくレポートを提出してほしい。

## 2 昨年度との授業方針の違い

昨年度の講義＝演習連結型授業（「社会思想」2、3、4年生対象）において受講生に課した課題は、今年度の課題に比べ以下の点でより厳しいものであった。

- (1) 受講生は、2008年12月末までに担当RAの指導に基づき、研究報告書を3回提出する。
- (2) それを踏まえて受講生は、2009年1月の授業においてプレゼンテーション（報告10分、討論15分、レジュメ配布）を行う。
- (3) 同年1月31日までに最終報告書（16,000字、400字×40枚以上）を提出する。
- (4) 各受講生が選択すべき研究課題も、以下のように分量、難度ともかなり厳しいものであった。

<昨年度の研究課題>

以下に挙げる思想家の中から1人を選択し、指定された諸著作を精読した上で、その思想家が『国家』『市民社会』についてどのような構想を抱いていたのかを説明すること。その際、各思想家の思想のキーワードを5つ挙げ、それらの理論的関連を説明しつつ、思想の論理構造の探求に努めること。

1. アリストテレス（『政治学』）、2. プラトン（『国家』）、3. キケロー（『義務について』）、4. マキアヴェルリ（『君主論』）、5. ホッブズ（『リヴァイアサン』1部、2部だけでよい）、6. スピノザ（『国家論』）、7. ルソー（『社会契約論』）、8. アダム・スミス（『法学講義』）、9. カント（『啓蒙とは何か』（岩波文庫所収の諸論文）と『永遠平和のために』）、10. ヘーゲル（『法の哲学』世界の名著）、11. マルクス（『ユダヤ人問題に寄せて／ヘーゲル法哲学批判序説』岩波文庫）

上記のような厳しい内容であったが、それでも昨年度は、12名の学生がプレゼンテーションを行い、11名の学生（2年生6名、3年生5名、4年生0名）が既定の条件を満たした最終報告書を提出した。

昨年度の授業においては全体として2年生の貢献が大きかったのだが、2009年度社会思想史は3、4年生を対象とする講義であることを考慮し、受講生の多様な関心に対応した柔軟な受講方式を採用することにした。本年度の授業方針の特徴は以下のとおりである。

- (1) 昨年度はRAと受講生のコミュニケーションを、主としてメールで行う方針を採用し

たが、面識のない相手に対して深い研究指導をすることは難しいという反省を踏まえて、受講生が確定した後、11月11日の授業において各受講生の指導を受け持つRAを紹介し、その後5グループに分かれて今後の方針を相談した。

(2) 昨年と違って12月中の研究報告書の提出、1月の授業におけるプレゼンテーションを一律に義務づけることはせず、学生の自主的な判断に委ねた。

(3) 年度末に提出する最終報告書の分量を「A4 40字40行で5枚以上10枚程度」(昨年度は40字40行で10枚以上)と大幅に減らした。

(4) 研究課題は、昨年度における古典的著作全体を指定した方針を緩めて、著作の一部にとどめた。

### 3 本年度の授業の経過とその評価

講義には29名の学生が履修登録した(3年生11名、4年生17名、修士課程1年生(商)1名)。そのうち13名の受講生がRAの指導を受けた。各RAが担当した学生の所属、学年は以下の通りである。

宮本敬子(3名)	経3、経4、法4
白井亜希子(2名)	社3、社3
赤石憲昭(2名)	社4、商(修士)1
南孝典(3名)	社4、社4、社3
小谷英生(3名)	社3、社3、社3

プレゼンテーションを希望した学生は5名(商(修士)1、社3、社3、社4、法4)であった。1月27日に実際にプレゼンテーションを行った学生は3名(社3、社3、法4)であった。2名は風邪のため欠席した。最終報告を提出した学生は11名であった。

商(修士)1	1名
経4	1名
社2	1名
社3	6名
社4	2名

結果から判断すると、学生の多様なモチベーションに合わせて柔軟な受講条件を用意したことは受講者数の増加に結びつかず、所期の成果を生まなかったといえる。

受講条件を緩和したにもかかわらず、RAを希望した学生の総数は昨年度(12名)とほ

ば同数であった。本年度 RA を希望した受講生はみな勉学に対する高い意欲を持っていたが、最初に受講条件をかなり低めに設定したためか、その後モチベーションを向上させるために教員と RA が必死の努力をしたにもかかわらず、十分な成果を生み出すことはできなかった。プレゼンテーションを希望した学生が 5 名（昨年度は義務的であったため 12 名）であったことがこのことを示している。義務という形式で課題を提示しないと、学力と意欲のある学生でさえなかなか動かないということを今年度の経験は教えてくれた。

最初に提示する受講条件は厳しく設定した上で授業を開始し、その後、受講生個々人の条件に合わせて個別的に受講条件を緩和するという方針を採用するべきであったと反省している。

さらに、今年度は社会学部発展教育科目（3、4 年生対象）であったことも、授業の進行に大きな影響を与えたと思われる。昨年度の社会学部基礎教育科目（2、3、4 年生対象）では時間に余裕のある 2 年生が大活躍したのだが、今年度は 3、4 年生のみを対象としていた。彼らは多忙で、所属クラブの責任者としてクラブ活動に多大な時間を注ぎざるをえない 3 年生が少なからずおり、また 3 年生が就職活動に要す時間は相当なものであると RA は報告している。そして、4 年生は冬学期を通して卒業論文に専念せざるをえず、特にプレゼンテーションを予定した 1 月が卒業論文提出の時期と重なっていたことも結果に反映されている。

以上のことから、今後、講義＝演習連結型授業を行う機会が与えられた場合には、次の 3 点を考慮すべきである。

- (1) 就職活動、卒業論文などの制約のない 1、2 年生が参加する講義を充てることが望ましい。
- (2) 3、4 年生の積極的な参加を高めるためには、夏学期開講が望ましい。
- (3) RA を希望する受講生の数に合わせて柔軟に RA を採用できるよう、制度的に工夫する必要がある。現行制度上は、各学期の開始以前に RA の人数、担当時間数などを決定しなければならない。しかし、実際を受講者数が確定するのは授業開始から 1 ヶ月後のことである。今年度は（3、4 年生対象、冬学期という条件も作用して）、昨年同様少人数の受講生であったので十分対応することができたが、今後数十名の学生が RA を希望した場合にどのように対応したらよいか、検討する必要がある。

#### 4 RA の演習指導

上記のような制約を抱えた今年度の講義＝演習連結型授業であったが、5 名の RA（以

下敬称を省く)はそれぞれ創意工夫を凝らして学生の指導に当たってくれた。各 RA の報告では、学生の学力、モチベーション、勉学条件などが具体的に記述され、今年度の経験における成果と問題点について詳しい記述がなされている。教員が海外出張中の 11 月 25 日は小谷が、12 月 2 日は赤石が、それぞれ講義テーマに関連した内容で講義を代行してくれたことも、感謝の気持ちを込めて特筆しておきたい。以下では、各 RA の報告の中から注目すべきと思われる点を記す。

宮本は RA 全体の統括者として、受講生のとりまとめ、受講生の選択したテーマに合わせた RA への担当学生の配分、配付資料の印刷と配布、プレゼンテーションの準備と当日の司会、最終報告書のとりまとめ、受講生のアンケートの作成とその集約、そして授業期間中教員、RA、学生の間を生じたあらゆる問題の調整や解決に粉骨砕身努力してくれた。宮本は昨年度の教訓を生かして、本年度は、3 名の担当学生と定期的に面談して研究指導に当たったが、その経過は「2 指導経過」に詳しく書かれている。初回のミーティングの際に適切なリーダーシップを発揮したことで、その後の勉強会の継続につながったことが、以下の文章からもうかがえる。

「教官と RA はミーティングを重ねた結果、指導方法は受講生の希望通りにするというところで合意に至ったため、先に学生の要望を聞くべきであったのだが、私は昨年度の講義＝演習連結型授業の経験から、初回だけでも時間をかけて顔をつきあわせて話し合いたいと思っていた。そこで学生たちに勉強会への参加を頼みこんだのである。幸いこの最初の勉強会で学生たちと『波長』が合ったという手ごたえを得たので、次回以降は学生の要望に合わせてと伝えた。こちらではメールでの論文指導に切り替わるだろうと予測していた。それゆえ彼らの返答は意外であった。学生 A が「勉強会をまたやりましょう」と面談形式の指導を希望したのである。そして学生 B に聞くと「それなら僕も付き合いますよ」と言う。そっけない言い方ではあったがしみりうれしかった。そこで今回は同じくカントの著作『永遠平和のために』で勉強会を行うと予告して解散した」

宮本は、「講義＝演習連結授業の意義と展望」において以下の重要な指摘を行っている。

第一に、本学の学生は、優れた学力や思考力を持っているにもかかわらず、それを小論文にまとめる能力・技術（基本形式、根拠の提示の仕方、文章のパラフレーズの仕方、引用文の挙示など）に弱点があること。

第二に、このことは「知識」の教授を急ぐあまり、「自分の頭で考える」営みを学生に修得させるよう指導する教育がなおざりにされがちな現在の大学教育のあり方と関係していること。

以上の認識を踏まえて、宮本は以下の提言を行っている。

「現在のような情報社会においては、『自分で考える』営みのための場所を教員が確保する必要がある。既成の答えに飛びつかせず待ったをかけること、順序だてて考察し自分の力でひとつの作品をつくる喜びを体験させること、そうしたことを可能にするような時間と場所を大学で改めて用意することが今の時代には求められているはずである」

この課題を効果的に遂行するために、RAを活用した教育は大きな役割を果たすはずである。

次に、一橋大学の学生の資質について白井が以下のように報告している。

「昨年えた感触では、一橋の学生はおおむね飲みこみがよく、外から吸収した情報を整理して器用にまとめることに長けている。しかしその分、自分自身の素朴な考えをゆっくり温めながらテキストの読解を深めてゆくよりは、参考文献で面白く扱われていたテーマや他人の意見を過不足なくまとめて見せる方向に流れやすいように思う。しかも、RAの指摘に対しては従順であり、無視することはあっても正面から反論しようとはあまり思わない」

こうした「優等生」的な学生に対して「主体的学習をサポートする」ことがいかに困難であるかという点について、白井はきわめて興味深い考察を加えている。

「今回担当した学生は兩名とも非常に優秀で、こちらが口を出すまでもなく、一貫して自主的に学習に取り組んでいた。しかし、そのぶん、RAが設定しため切よりは自分のスケジュールが優先となるし、書いている途中の文章にあれこれ言われるよりは、ある程度出来上がったものを見せて、自分が聞きたいポイントについての質問にのみ答えてもらい、能率的にレポートを完成させたいということにもなる。テキストの選択もレポートの内容の輪郭も、背伸びしてしまって後で苦勞することがないように予め計算しておく。最終的にレポートを提出しさえすれば単位は取得できるのであるし、RAと突っ込んだ議論を交わすことはメールでは難しく、かといって直接に会う時間は割けず、何度もRAに中間報告をしてそのつど書き直しを命じられては面倒が増えるから、連絡も最小限にする——極端に言えば、こういうことになるわけである。『主体的に学習する』この意味が仮にこうしたことならば、『サポート』する者の居場所はない」

このようなタイプの「優秀」な学生に対して、どのようにしてもう一段高い課題に挑戦するモチベーションを与えることができるか、この課題に真正面から取り組みつつ、白井は「学生に対して、少し背伸びしないと越えられないようなハードルを課すこと」の重要性を指摘している。

白井が担当した2名の学生は、「課題テキストの周到な要約に加えて自分なりの社会観

も盛り込んだ力作」、「課題テキストをじっくり読み込んで着実に研究を進め、課題テキストの文脈に丁寧に寄り添って展開した説得力あるレポート」をそれぞれ提出するに至った。RAの努力は、それなりに報われたといえよう。白井は、「演習連結型授業の強みは、意欲を持ちながらそれを持て余している学生に、こうした願望を満たす場を提供できるところにある」と記している。

南は、学生がRAとのコミュニケーションの仕方（面談、メールなど）を自由に選択できるという条件を守りつつ、担当した2名の学生（当初は3名であったが、のちに1名は辞退）にきめ細かい指導をした。南もまた、学生の自発性を重んじるだけでは、消極的な学生の場合どのように対応すればよいのかという問題が残されてしまうと指摘している。

赤石は、担当学生2名とのコミュニケーションを維持し、学生のモチベーションを高めるために授業に毎回出席した。

「本来RAは、初顔合わせの時と、年明けの4回の発表時以外は、出席の義務はない。しかしながら、昨年度、担当学生との対面でのコミュニケーション不足を痛感したため、今年度は、授業に出席し、その前後に担当学生との面談の時間を持つことにしたのである。これは非常に成功であった。これにより、学生の様子および作業の進展を定期的にチェックもできるし、対面で接していると……『高い責任意識』も持ってもらえる」

こうした赤石の努力を高く評価したい。赤石は、商学研究科修士課程1年の院生を担当した。この院生は、これまでに社会思想史関係の勉強をした背景がなかったが、毎週の授業後、この院生と面談を続け、水準の高い最終報告書の提出まで指導した。

しかし赤石は同時に、今年度の受講生に対する課題を、文献上も報告義務の点でも緩和したことに対して厳しい批判を寄せている。

「このような配慮は、……より多くの受講生を集めようという意図と無縁ではないと思われるが、このようにすることで、逆に、この授業の価値を低めてしまっているのではないかと私は考える。歴史的に評価された骨のある社会思想の本を1冊読んでレポートにまとめるという、おそらく大学でしかできない貴重な体験をしてもらうことがこの『講義＝演習連結型授業』の目的であり、そして、その難解なテキストを読み切るために、それを補助するRAが採用されているわけである」

「また今年度は、昨年度と比べ、様々なノルマも緩和されていた。……基本的には、共通のノルマを設定し、問題が生じたら、個々のケースで柔軟に対応していく、という形で行っていく方がベターなのではないかと思う。基準を緩和しても、結局の所、昨年度より受講生が増えたかということ、必ずしもそういうわけではない。このため、私は、その方針とし

ては、昨年度のやり方を個人的に支持したいと思う」

講義＝演習連結型授業は未知の分野であり、試行錯誤の連続であったが、赤石の批判は真摯に受け止めたい。

制度的な問題として、南と赤石は、受講生が確定する以前に RA を確定しておかなければならないことの問題を指摘している。仮に受講希望者が数十名に増えた場合、4～5名の RA では対応しきれない事態が生じる。この問題は今後の検討課題としておきたい。

小谷は、初めての RA であったにもかかわらず、社会学部3年の3名の学生を担当し、読書会、メールでのやりとりなどを駆使して、きわめて密度の高い指導をしてくれた。またその経験をまとめた報告も、きわめて充実した内容になっている。

「能力が高い」にもかかわらず「その能力を活かしきれずに終わってしまう学生」、「能力がないのではなく、能力の使い方を知らない学生」、「物事に興味がないのではなく、興味の対象を見つけられない学生」が少なくないことを、小谷は、具体例を挙げて指摘している。小谷は、「多くの学部生は欧文献のコピーの仕方を知らない。というのは、出版社や出版年度といった情報が、日本語文献とは違う位置にあるからである。また、引用に際しての文献の挙げ方も知らないひが多い（筆署名、イタリックの書名、出版場所、出版年度の順に列挙など）」と指摘している。

また3年生のおかれた状況について、「会社説明会に訪れたり、エントリーシートを作成したりで、学問にうち込むには適した環境に彼らはいない」こと、「3年生の冬学期というのはサークル・部活が（4年生の引退に向けて）忙しくなる時期であるか、あるいは（代替わりしたばかりで）3年生が最上級生となり、組織の運営等々でやはり忙しくなる時期である」ことなどを指摘している。

講義＝演習連結型授業の今後の改善点として小谷は、(1) 学生に対するハードルを高め設定すべきである、(2) 学生に講義で扱った文献の中から研究テーマを選択させ、レポートを作成させることが適切である、(3) 学部1、2年生を中心とした講義を充てるべきである、という傾聴すべき提言をしている。

## 5 受講生の評価

末尾に学生の授業評価アンケートの集計を掲載した。アンケートを寄せた9名の学生は、「RAによる指導に関する満足度」（設問2）に対して「満足」6名、「やや満足」3名で、全員が何らかの形で満足を得ていた。また「今回のような、教官による講義とRAによる

論文指導を組み合わせた授業が来年度以降も開講されることを希望しますか？」(設問3)という質問に対しては9名全員が「希望する」と回答した。

設問2、設問3に対する理由を読むと、今年度の講義＝演習連結型授業における教員とRAの努力がそれなりに学生たちに伝わっているという思いを抱くことができ、励まされる。講義＝演習連結型授業が一橋大学の教育にとって本当に意義のある試みであるのかどうかを判断する主体は学生である。そこで、学生が寄せた文章の中からいくつか紹介させていただく。

「難解なテキストを読むのは、ほとんど初めてだったので、ひとつの箇所について2、3日通して考え、筋の通った解釈に結びつけるという訓練ができたのは喜ばしい経験でした。一方で、まとまった分量を読みこなすには時間が足りなかったことも事実です。今後もこうした類のテキストにチャレンジしていきたいですが、次は時間的な制限がない中で取り組んでみたいです」

「作成中のレポートに対して、的確なアドバイスをしてもらえたと思います。引用の仕方や註の付け方など参考になりました。自分の問題意識にばかりとらわれて、選択した文献よりも参考文献の興味のある部分をとりあげるような形式で文章をまとめてしまった時には、きちんと方向修正のできる助言をいただきました。励みになるお言葉もいただき、そのおかげで最後まで高いモチベーションで課題に取り組むことができたと思います。もっと、私自身に時間がつくれればきっとRAの方から、もっといろいろなことが学べたと思います。冬学期は忙しくてせっかくのRAのシステムを最大限に活かせなかったと思うので、その点は心残りです」

「自分が難しく思っていたなかなか手をだせない文献に向き合ういい機会だと思います。選択した文献を精読して内容を理解することで、その著者が何を考えていたのかに触れ、自分自身の世界の見方も広げられたと思います。それを通して考えられる物事も増えますし、そうして他の物事を考えるときのいい思考実験の材料になると思います。後輩の方も、こういう機会を活かして、古典を読破する達成感や、ものを見るときに観点が広がっていくわくわくする感覚を味わってほしいと思います」

「学生を放任しすぎて、自分で考えなくても暗記するだけで単位が取れるような授業も多いので、このように知識を覚えるだけでない授業は貴重だと思います。また、哲学についても難解すぎる内容をただ一方的に講義するといったものや、広範囲のことを取り扱わずに何を学んだのかが心に残らない授業も多いのですが、この授業のように、伝えたい部分の的を絞って、ゆっくり丁寧に噛み砕いて説明してくれる授業は分かりやすく、何を学

んだのかが残るので良かったと思います」

「3年次の冬学期に履修した同様の授業（ドイツ研究入門Ⅱ、藤野寛先生）での経験が、卒論の作成に大いに活かされている。文献の探し方などの技術的な面は、その時にTAを担当された成田さんに一から教えていただいた。また、大きいレポートを3年次に書いておくことは、卒論へのひとつのステップとして意味があったと思う。四年生になる前にこのような授業を受けておくことは、後々のためになることであると思う。また、壇上が上がって報告をする機会はほとんどないため、これを体験する場があることは受講生にとって良いことであろう」

さらに本年度の講義には商学研究科修士課程の院生が1名参加していたのだが、この院生は次のような感想を述べている。

「専攻している経営学以上に、哲学における言葉の意味の掴み取り方の難しさや使い方の厳密さに驚いたのですが、それでもすごく丁寧に分かりやすく指導してくださって、『学生が何か得るものがあるような授業にしたい』という平子先生やRAの方々の熱意と真心を感じました。講義を受けてみて、思っていたほどにはシビアでなかったのですが、多くの学生が途中でやめてしまったのはもったいないと思いました。学生の意識を高める必要もあると思うのですが、せっかく良い授業なので『やる気のある人だけ』ということ強調しすぎて、『授業はおもしろいから聞いていたいけどレポートとか厳しそうだしやめようかな』といった理由から途中でやめてしまう人がいるのではないかと、やはりもったいないかなと思います。個人的には、国家というものや今後世界が向かうべき方向についての良いヒントを得られ、とても満足しています。ありがとうございました」

百名以上の学生が受講する授業が多くある中で、私たちが行った授業はわずか十数名の学生を対象にするごく小さな授業であった。RAの人数を適切に配置するなどの課題は残されているが、講義＝演習連結型授業が今後も継続され、より多くの学生が参加するようになることを願っている。

(たいらこ・ともなが／社会思想史)